



Title	ことばを教える・学ぶ：人との出会いに導かれて
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 115-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104491
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ことばを教える・学ぶ——人との出会いに導かれて

井元 秀剛

本年三月をもって定年を迎えることになった。本学言語文化部に講師として着任してから、早いもので三十二年が経つ。その間、実に多くの方々にお世話になった。思えば三十三年前、パリで留学中の私のもとに春木先生から突然、驚くような嬉しい手紙が届いた。当時はまだ公募が一般的ではなかった時代であり、その手紙には「大阪大学に来る気はないか」と書かれていた。もちろん一も二もなく承諾し、準備中だった博士論文もひとまず棚上げして帰国した。

大阪は初めてで、阪神電車と阪急電車の区別もわからず、道に迷って健康診断に遅れたことを思い出す。それから人生の半分をこの大阪で過ごし、最も長い時間を費やした場所が大阪になったのだが、振り返ればあつという間であった。それほど充実した、密度の濃い半生だったのである。

最初の一年だけ大高、岡野両先生とご一緒したが、以後は高岡、春木、金崎、北村、岩根、三藤各先生方と長く過ごした。私はその間ずっと最年少で、公私にわたり多くのご指導をいただいた。その後、林、高橋、渡辺、バルカの各先生が加わり、いつの間にか最年長になっていたが、今もお周囲の先生方に導かれているという感覚は変わらない。そもそも、これほど仲の良い職場はあまりないのではないと思う。周囲を見回しても、多くの講座では内部で確執があるし、大学が異なれば、同じフランス語の教員同士でも対立することが少なくない。そのようななかで、いまこうして文学部の研究誌で定年を祝ってもらえることは、まことに希有なことであり、心からありがたく感じている。

ことばを教え、学ぶという営みは、重い荷物を背負いながら、はるか遠い道のりを一步一步進むようなものである。研究もまた同様で、最初は「名詞句がどのように指示対象を確定するのか」という問題に数年を費やし、次には「時間をどのように表現するか」という一点にまた数年をかけた。その結果、研究テーマとしては限られていたが、深く掘り下げる日々だった。

そうした研究の知見を活かして、フランス語教育にも携わってきた。講読の授業は昔ながらの訳読方式で行い、学生に課題の翻訳を宿題として課し、採点とコメントを返すという方法であった。AI など存在しなかった時代、学生たちは辞書を片手に何時間も予習に取り組んだ。よくついてくれたものだと感心する。こちらも学生の答案や発言から学ぶことが多く、Discotext など例文を検索し、毎回の授業にかなりの時間をかけて準備した。そうして時間をかけた者どうしが教室でぶつかり合うときの緊張感と充実感は格別で、私自身も学生たちもその張りつめた空気の中で心地よさを感じていた。学生たちに恵まれた私は、本当に幸

せだったと思う。

今はAIの時代であり、もはや私が行ってきたようなタイプの授業は成立しにくい。今年は ChatGPT を活用し、かつて講読で扱った『シェルブールの雨傘』を題材に、学生をグループに分けて主要表現を抽出し、解説を加え、それらの表現を用いたスキット（寸劇）を作って演じてもらう授業を行ってみた。AI を駆使して学生自身にすべての準備を任せ、私はコメントを添えるだけにしたところ、学生たちは楽しそうに取り組み、これまでにない自然なフランス語を披露してくれた。

こうした授業が今後の主流になっていくのだろうと感じる一方で、そのような時代の教師でなくてよかったという安堵と、もう少し新しい授業を試してみたかったという思いが交錯するこの頃である。

ことばは、変わりゆく時代の中でも人と人とを結ぶ不思議な力を持っている。その力を信じながら、これからも静かに見つめ続けていきたい。

（人文学研究科言語文化学専攻教授）

